倉本聰さん追悼座談会

布部地区の人たちが語る『北の国から』の思い出



出席者

坂口 道郎さん（91）
関口 新吾さん（54）
河井 若子さん（64）
松本 正浩さん（61）
松本 美鈴さん（59）
金子 栄二さん（57）
※松原良成さんは来訪者応対のため不参加

不朽の名作『北の国から』を手掛けた脚本家の倉本聰さんが9月18日に亡くなった。物語の始まりの舞台となったのが、2024年3月に惜しまれつつ廃止された根室線の布部駅。黒板五郎一家がディーゼルカーから降り立った名シーンは、いまなお記憶している人も多いだろう。かつて倉本さんは、この小さな駅の待合室でドラマの構想を練っていたそうで、体調が万全ではないなか、ラストランの日に駆けつけてくれたのは、布部駅への思いが深かったからに違いない。

その布部駅は、地元で観光業を営む松原良成さんが取得し、『北の国から』ファンの聖地に生まれ変わった（本誌10月号参照）。今回、ドラマと駅を愛する地元のみなさんに、それぞれの思い出を振り返っていただいた。

（フリーライター・内海達志）

車椅子から立ち上がり…

――みなさんにとって『北の国から』にはどんな思い出がありますか。

坂口 布部駅に知り合いがいて、彼が「ドラマの撮影をしているよ」と教えてくれたので、五郎（田中邦衛）、純（吉岡秀隆）、螢（中嶋朋子）が列車から降りてくるシーンを見ることができました。ただ、そのときはまだ、なんのドラマか分からず、子役の2人も誰なのか知りませんでした。竹下景子（雪子）が駅で待っていて、その数分後、草太（岩城滉一）がオートバイでやってきたのを覚えています。この出演者のサイン色紙は、知り合いの駅員が私のためにもらってくれたものです。（1980年10月10日、坂口さんへ、と記されている）

根室線ラストランの日には、倉本先生への花束贈呈役を務めさせていただきました。その日は体調がよくなかったのですが、河井さんが迎えに来てくれて。先生とはちょっとした世間話をしただけですが、同年代（倉本さんが1歳上）なので話は合いましたよ。先生は車椅子で、自分も1年後にはこうなってしまうのかなとも思いました（笑）。上機嫌でニコニコされてはいましたが、近寄りがたいオーラというか、威厳のようなものを感じました。

▲前列左から松原良成さん、坂口道郎さん、松本美鈴さん、関口新吾さん、後列左から金子栄二さん、松本正浩さん、河井若子さん。坂口さんが手にしているのは、出演者のサイン色紙

関口 私は苫小牧出身で、この風景が好きで移住しました。ドラマは子どもの頃からみていましたが、内容を理解するのは難しかったですね。純くんと同世代ということもあり、「初恋」（1987年放送）あたりから、自分自身と重ね合わせるようになりました。その後、過去の作品を改めて見直し、これはすごいドラマだ！と。そして、自分に子どもが生まれると、五郎さんの烈しい生き方にも共感できるようになりました。

娘が富良野演劇工場に勤めており、そんな

続きは『月刊クォリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）